

AFS 留学プログラムの満足度に関する実証的研究

ホストファミリー・アンケートを中心に¹

財団法人エイ・エフ・エス日本協会²

平成 12 年 3 月 31 日

¹ 本研究は、財団法人日本国際教育協会の平成 11 年度高校生留学交流研究指定制度に係る研究協力団体の指定を受け、財団法人エイ・エフ・エス日本協会が行った研究である。

(調査・研究担当：瀬戸千尋・獨協大学大学院外国語学研究科英語学(異文化間コミュニケーション論)専攻博士後期課程 1 年、小山慎治・獨協大学大学院外国語学研究科英語学(異文化間コミュニケーション論)専攻博士前期課程修了)

² 第一次世界大戦、第二次世界大戦を通じて行われた傷病兵の看護、運搬などの American Field Service (野戦衛生奉仕団) の活動に始まり、現在では高校生中心の交換留学を 55 の国と地域で行っている。日本協会は、その日本支部として 1955 年に設立され、1980 年に文部省認可の財団法人となった。正式名称はエイ・エフ・エスであるが、論文では AFS と記す。

はじめに

現在日本には多くの交換留学団体があり、それぞれ独自のプログラムを提供しながら、留学生の派遣と受入れを行っている。特に受入事業については、文部省が推進している「留学生受入れ10万人計画」の下に力を入れており、1993年度以降は、留学生受入総数は5万人を超えている。この統計には、高校生の留学生は含まれておらず、高校生を含めた総数は5万5千人を超えることになる（文部省学術国際局留学生課、1998）。これら留学生の受入れを促進する際、ホストファミリーを確保することが重要な課題となる。つまり、留学生を受入れるホストファミリーにモチベーションを与えるようなプログラムを提供することが必要である。具体的には、ホストファミリー経験者のプログラムに対する評価を分析し、その結果を十分に反映させるようなプログラムの提供と、そのための不断的な努力が不可欠なのである。

大学や各種専修学校に通う留学生は、必ずしも日本の一般家庭に滞在し、その家族と共に生活しているわけではない。たとえホームステイをしていたとしても、それは各大学等によって紹介された家庭であり、まとまった量のデータを収集し、その評価をまとめることは難しい。このような事情から、大学や各種専門学校に通っている学生を受入れているホストファミリーのプログラムに対する満足度の調査や研究は行われていない。

その意味では、高校生の交換留学は、ほとんどの生徒が留学団体を通してホームステイをしているので、調査や研究は比較的容易である。AFSでは、毎年度末にホストファミリーに対しアンケートを行い、翌年度のプログラム向上のための努力を続けてきた。また、このようなデータを継続して収集し、保存している団体は他にはない。今日のように価値観が大きく変化し、多様化している時代に、継続したデータがあるということは非常に大きな意味を持っている。このデータを基に、ホストファミリー、留学生における年毎の変化を観察することができるからである。また同時に、将来的なホストファミリーや留学生の傾向を予測し、更にはそれに対応したプログラムの改善も可能となる。しかしながら、これまでAFSが行ってきた分析は、多分に分析する者の主観に基づいているものであり、科学的、客観的なものとは言えなかった。つまり、その分析の結果は、一般化できるような妥当性があるという保証はなく、したがって、アンケートを十分に活用できていたとは言えないものであった。

本研究では、それぞれに目的を持つ2つの研究を行う。

まず、アンケートの形式に対して分析を加え、アンケートが測定しようとしている内容とその結果が有効なものとなり得るかを明らかにすることを目的とする。これは、アンケートの形式自体を評価することによって、この研究が信頼性と妥当性を持つものであるかどうかを検証するために行うものである。

次に、AFSが1995年度から1998年度までの4年間に収集したホストファミリー・アンケートを統計的に分析することにより、AFSの提供するプログラムにホストファミリーがどの程度満足しているかを明らかにすることを目的とする。そのために、その満足度が年度別、ホストファミリーの地域別、留学生の出身国別で違いがあるかどうかの分析を試みる。年度別の差を分析することの意味として、AFSのプログラムが質的にどのように変化しているかを明らかにすることができる。ホストファミリーの地域別の差を分析することによって、AFSのサポート体制の面で改善・強化をしなければならない地域または支部

が明確になり、今後のプログラムの向上につなげることができる。留学生の出身国別の差を分析することにより、満足度の低いホストファミリーの留学生がどの国から来た留学生なのかが明らかになる。この結果を受けて、その原因を研究し、来日前及び来日オリエンテーションの内容等にも反映することができる。また補足的に、プログラムへの満足度とプログラムを他人に推薦したいと思うか、との間に関連があるかについても分析を試みる。これは、受入プログラムへのホストファミリーの満足度がホストファミリー確保と直接的につながっているかどうかを明確にし、今後のホストファミリー募集に示唆を与えるものとなる。

以上、本研究の目的について説明した。このことから分かるように、この研究は AFS 受入プログラムに対する通時的、実証的な研究であり、現状を把握し、今後のプログラムの向上を図るために極めて有意義な研究といえる。

これらの目的を達成するために、本論文は次のように構成される。第 1 章においては、本研究で採用される研究方法を紹介する。ここでは、アンケートに回答したサンプルの説明とその内訳、アンケートを統計的に処理するためにどのような処理を施したかについて説明される。第 2 章では、本研究で行われる 2 つの分析の手続き及び分析方法についてそれぞれ説明される。第 3 章においては、それぞれの分析の結果と解釈が提示される。第 4 章では、分析結果に対する考察が加えられ、より総合的な示唆を与えることになる。結論においては、本研究における問題点の指摘や今後の研究の方向性と可能性について言及する。

1. 研究方法

1.1 サンプルについて

本研究では、1995 年度から 1998 年度までの AFS 年間受入プログラムのホストファミリー・アンケート³を基礎データとして採用する。したがって、その期間に年間プログラム留学生のホストファミリーを経験した家庭が本研究のサンプルである。ただし、このアンケートは、各年度末に行われたアンケートであるため、諸事情により必ずしも受入期間が 1 年間ではないホストファミリーも含まれている⁴。しかしながら、本研究の目的は、ホストファミリーの AFS 受入プログラムに対する満足度を測定するものであり、受入期間の長短が分析結果に直接的に大きな影響を及ぼすものとは考えにくい。よって、サンプルは、受入期間の長短にかかわらず、アンケートに回答した全てのホストファミリーである。

³ このアンケートは、AFS 国際本部によって作成され、1998 年度より国際統一様式となったものである。したがって、本研究を行った担当者らによって作成されたものではない。

⁴ 留学生の中には、やむを得ずホストファミリーチェンジをした生徒もいる。そのため、ホストファミリーが、必ずしも留学生と 1 年間を共に過ごしたというわけではない。このアンケートは、それぞれの年度での帰国直前に行われたものであるため、受入れをした期間が短期間の場合もある。更に、1995 年度から 1997 年度のアンケートについては、諸事情により早期帰国した生徒のホストファミリーの回答も含まれていない。

サンプルの内訳は、1995年度84、1996年度119、1997年度166、1998年度138の計507であった。ただし、今回行われた分析では、欠測値が含まれる場合はサンプルを除外するように処理したため、各研究のサンプルの合計は必ずしもこれと一致しない。

1.2 尺度について

AFSが1995年度から1998年度までの4年間にわたって実施したホストファミリー・アンケートの内容から、共通すると思われる項目を抽出し、数量化した。抽出された項目は以下の10項目である。

- (1) プログラムの事前説明の評価
- (2) プログラムの資料の評価
- (3) プログラムに関する会合の評価
- (4) ホストファミリーに対するサポート体制の評価
- (5) 企画の手配や計画に対する評価
- (6) 留学生の留学準備に対する評価
- (7) ホストファミリーと留学生の組合せに対する評価
- (8) 留学生のホストファミリーへの適応に対する評価
- (9) 留学生の地域社会（学校を含む）日本文化への興味・関心に対する評価
- (10) ホストファミリーとしての満足度

数量化の手順としては、各年度のアンケートに共通している3ポイントのスケールを用いた。そして、評価のもっとも低いものを1点とし、もっとも高いものを3点とした。

また、アンケートが実施された年度により、項目に多少の差異が見られたため、上記の10項目と必ずしも一致しない項目も散見された。このような場合、内容的に明らかに違うものは除外し、今回の分析には含めないことにした。なお、内容的に似通った複数の項目がある場合、それらの平均点を求め、1つの項目として処理をした。例えば、(9)の「留学生の地域社会（学校を含む）日本文化への興味・関心に対する評価」に関して、1996年度以降のアンケートでは、「地域社会への適応」と「学校への適応」は区別され、それぞれに対しての評価が求められていた。これに対し、1995年度のアンケートでは「地域社会」という1つの項目でしか評価を求めていなかった。そこで、1996年度以降のものに関しては、「地域社会への適応」と「学校への適応」におけるそれぞれの評価の平均点を求め、より広義の「地域社会への適応」という項目を構成した。

以上、アンケートに含まれる共通項目と、その数量化について説明した。アンケートに含まれる共通項目の抽出には、多分に筆者らの主観を含んでいると思われるが、数量化をし、統計処理を行うことで、ある程度の客観性は保てるであろう。

1.3 手続き

1.3.1 研究(1)

アンケートの形式に対する評価を行うために、アンケートが測定している内容と、その得点の意義について分析を行った。

まず、アンケートが何を測定しているのかを明らかにするため、アンケートから抽出した 10 項目について、因子分析を行った。

因子分析は、2 つ以上の変数間の関係を明らかにするための分析手法である。つまり、複数の変数で共通する因子を含んでいるもの同士をグループ化するために行う統計的処理である。アンケートの各得点を見るだけでも各項目の評価について知ることはできるが、全体的な傾向を見るためには情報を圧縮した形で示す必要がある。このため、10 項目の変数間の相関係数を算出し、それぞれ関連のある変数同士をいくつかのグループにまとめるのである。全 507 のサンプル中、有効回答である 355 を対象として分析を行った。

次にアンケート各項目の平均点での差が単なる偶然の結果なのか、あるいは統計的に意味のある差(必然的な差)なのかを検定するため、分散分析を行った。分散分析を行う目的としては、有意差の検定はもちろん、今後の AFS のプログラムにおいて、強化していくべき点を具体的に示すことにある。本研究では、全 507 のサンプルから抽出された 10 項目それぞれの平均点を求め、10 項目の変数間における有意差の検定を行った。

1.3.2 研究(2)

アンケート結果の評価を行うため、年度別、地域別、留学生の国籍別に満足度の違いを分析した。

先に抽出した 10 項目の評価の合計点を求め、これをプログラムへの満足度の指標とした。最低点は 10 点で、最高点は 300 点になり、点数が高ければ高いほどプログラムへの満足度が高いと解釈する。これらの満足度の平均点を、年度別、地域別、留学生の国籍別で比較した。なお留学生の国籍は、留学生の数が 5 未満の国はその他として 1 つのグループとして処理をした。

また、補足として、各年度の満足度がプログラムへの参加を他人に奨めるか否かということと関係しているかについても分析した。

2. 分析結果

2.1 研究(1)

アンケート有効回答数 355 のサンプルの各項目における得点に対し因子分析を行ったところ、表 1 のような結果が得られた。

因子分析の結果、3 つの内在する因子が抽出された。これらの因子を、1) 日本協会に対する満足要因、2) ホストファミリーとしての満足要因、3) 留学生に対する満足要因、と呼ぶこととする。この結果から、1995 年度から 1998 年度にかけて行われた AFS プログラムに関するアンケートは、主にこれら 3 つの事柄を評価しているといえる。ただし、3 因子に対応する質問の数には偏りが見られるため、今後の改善が望まれるところである。また、根本的な問題として、これらの 3 因子についてのみの測定で、プログラム全体の評価を行うことが妥当かどうかということ議論する必要があるように思われる。

表1: アンケートの内容に関する因子分析の結果 (ハリマックス回転)

変数名	因子 1	因子 2	因子 3
事前説明	0.628	0.088	0.095
資料	0.735	-0.059	0.105
会合	0.735	-0.042	0.116
サポート体制	0.619	0.105	-0.006
企画の手配・計画	0.568	0.089	0.169
ホスト体験の満足度	0.043	0.735	0.121
ホストと留学生の組合せ	0.050	0.810	0.176
留学生のホストへの適応	0.041	0.801	0.213
留学生の留学準備	0.243	0.216	0.563
地域社会、日本文化への 興味・関心	0.074	0.426	0.545

注 表の数字は相関係数。±.2から±.4は弱い相関、±.4から±.7は中程相関、±.7以上は強い相関と解釈する。

次に、アンケートの各項目別の平均点を比較した結果を示す。

表2は、各項目の平均点と標準偏差、及び分散分析の結果を示したものである。

分析の結果、各項目間の得点の差は有意であった ($F(9, 4817) = 12.99, p < .01$)。したがって、各項目の平均点の得点が高いものほど評価が高く、低いものほど評価が低いというように、各項目間において序列がつけられたことになる。もっとも評価が高いのは「留学生のホストへの適応」であり、以下に「ホストと留学生の組合せ」、「事前説明」、「サポート体制」、「資料」、「会合」、「企画の手配・計画」、「留学生の地域社会への興味・関心」、「留学生の留学準備」の順に評価が高くなっている。

表2: アンケートの各項目の平均点と分散分析の結果

項目	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>
事前説明	491	2.51	0.71	
資料	478	2.45	0.77	
会合	432	2.41	0.83	
サポート体制	452	2.49	0.75	
企画の手配・計画	507	2.34	0.85	
留学生の留学準備	483	2.30	0.83	
ホストと留学生の組合せ	482	2.57	0.69	
留学生のホストへの適応	495	2.65	0.67	
地域社会、日本文化への 興味・関心	506	2.33	0.76	
ホスト体験の満足度	493	2.61	0.67	12.99 **

注 ** $p < .01$ 。N=サンプル数; M=平均点; SD=標準偏差。

以上、研究(1)の結果を示した。分析の結果、アンケートは、「日本協会に対する満足要因」「ホストファミリーとしての満足要因」「留学生に対する満足要因」という3つの因子から構成されていること、また、AFSプログラムに参加したホストファミリーは、留学生との出会いに比較的満足度が高く、プログラムの運営にも中程度の満足を得ているが、留学生の細かな生活態度という面では比較的満足が低いという傾向が、数字から読み取れる。

2.2 研究(2)

アンケートの項目の合計による満足度の分析の結果を以下に示す。

まず、年度別に見た場合、表3が示す通り、年度別の満足度の差は有意ではなかった($F(3, 503) = 1.71, n.s.$)。

この結果は、年度による満足度の差はないことを示している。少なくとも1995年度から1998年度にかけては、参加者の満足度は下がっていないといえる。

表3: 年度別満足度の平均点と分散分析の結果

年度	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>
1995	84.00	23.15	5.10	
1996	119.00	23.79	4.90	
1997	166.00	23.93	4.48	
1998	138.00	22.71	5.89	1.71

注: *N*=サンプル数; *M*=平均点; *SD*=標準偏差。

次に、地域別の満足度の分析結果を示す(表4参照)

分散分析の結果、地域による満足度の差は有意ではなかった ($F(5, 490) = 0.95, n.s.$)。この結果から、各地域間に満足度の差はなく、各地域の活動は一定の質が保たれていることが示唆される。

表4: 地域別満足度の平均点と分散分析の結果

支部名	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>
東日本	92	27.15	5.76	
東京	79	28.21	5.86	
中日本	133	26.74	6.15	
大阪	128	27.90	6.39	
九州	63	27.59	6.95	0.95

注: *N*=サンプル数; *M*=平均点; *SD*=標準偏差。

次に、留学生の国籍による満足度の分析の結果を示す。(表5参照)

分散分析の結果、その差は有意ではなかった ($F(17, 487) = 1.30, n.s.$)

この結果から、留学生の国籍によって満足度の差はないということが読み取れる。

表5: 留学生の国別満足度の平均点と分散分析の結果

国名	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>
AUS	150	27.89	5.63	
BRA	21	26.52	7.51	
CHI	9	27.89	4.28	
CRC	18	29.50	5.39	
DEN	8	24.75	4.52	
FIN	7	25.57	10.54	
FRA	17	27.00	7.51	
GER	17	26.29	6.82	
INA	38	29.39	4.66	
MAS	15	28.87	4.16	
NOR	13	27.77	6.14	
NZL	42	28.10	6.71	
SUI	12	27.92	5.79	
SWE	6	24.67	3.30	
THA	38	27.26	6.46	
USA	74	25.49	6.21	
VEN	7	24.86	6.51	
その他	13	26.08	4.51	1.30

注: N=サンプル数; M=平均点; SD=標準偏差。

国名は付録を参照のこと。

最後に、プログラムに対する満足度と他人に AFS プログラムへの参加を奨めたいと思うかということに関連が見られるか、について分析を行った。

ダミー変数を用い、AFS プログラムを推薦したいと思うかどうかと満足度との相関係数を求めた。ダミー変数は、「推薦する」と答えたものを3、「条件付きで推薦」を2、「推薦しない」を1とし、満足度と推薦という行為に何らかの相関が見られれば、正の相関が見られるように処理をした。

重回帰分析の結果、アンケートの項目と、推薦という行為には相関がないことが明らかになった(表6参照)。

表6: 満足度と推薦の重回帰分析の結果

相関行列	事前説明	資料	学会	サポ-ト体制	企画の手配計画	留学準備	組合せ	ホストへの適応	日本文化への興味	ホスト体験の満足度	推薦の有無
事前説明	1.00										
資料	0.34	1.00									
学会	0.41	0.38	1.00								
サポ-ト体制	0.40	0.34	0.47	1.00							
企画の手配・計画	0.35	0.33	0.35	0.48	1.00						
留学生の留学準備	0.19	0.09	0.16	0.19	0.25	1.00					
ホストと留学生の組合せ	0.16	0.09	0.13	0.17	0.14	0.37	1.00				
留学生のホストへの適応	0.23	0.02	0.12	0.19	0.11	0.36	0.71	1.00			
地域社会、日本文化への興味・関心	0.16	0.07	0.13	0.15	0.12	0.48	0.44	0.52	1.00		
ホスト体験の満足度	0.16	0.09	0.14	0.17	0.20	0.28	0.59	0.58	0.39	1.00	
推薦の有無	0.10	0.11	0.11	0.11	0.12	0.11	0.10	0.09	0.12	0.09	1.00

3. 考察

3.1 研究(1)

研究(1)の目的は、アンケートの形式を評価することであった。まず、抽出した10項目に対し因子分析を行った結果、このアンケートは、「日本協会に対する満足要因」、「ホストファミリーとしての満足要因」、「留学生に対する満足要因」という3つの因子によって構成されているということが明らかになった。

これは、ホストファミリー体験の満足度を測り、それを基にサポート体制の評価と充実を図るといふこのアンケートの目的に合致するものであり、アンケートの妥当性を示しているといふことができる。まず、ホストファミリー体験を評価する場合、AFS日本協会のさまざまな業務に対する評価は大きな割合を占める。なぜなら、留学生滞在期間中、ホストファミリーに対してさまざまな情報やサポートを提供するのは日本協会だからである。特に、問題が発生した場合の日本協会の対応やサポートは、この体験の評価を決定する重要な要素の一つと考えられる。次に、ホストファミリーとしての自負と達成感がなければ、ホスト体験に満足したという評価を下すことはない。この意味から、「ホストファミリーとしての満足要因」は必要な項目であると判断できる。つまり、この因子によって、AFSの提供するプログラムがホストファミリーにどの程度の自負と達成感を与えているかということを見ることができるのである。最後に、「留学生に対する満足要因」も不可欠である。ホスト体験がよいものであったかどうかは、ホストした留学生によって大きく左右される。このことは、アンケートの自由筆記の部分⁵に全体的な傾向として表れているように思える。例えば、この体験に満足し、このプログラムを他人に推薦したいと記述しているホストファミリーが受入れた留学生の多くは、異文化に溶け込もうと努力し、ホストファミリーと比較的うまくやってきた留学生が多かったように見えたからである。

以上のように、因子分析の結果得られた3つの因子の全ては、このアンケートの目的達成に大きく貢献する要因ばかりである。したがって、このアンケートはAFSが測定しようとしていた項目を満たしていると判断できる。つまり、今後も基本的にこのアンケートを使用することに関し、特に大きな支障はないと考えられる。

次に、抽出された項目間で必然的な差があるかどうかを明らかにするために、分散分析を行った。その結果、各項目間で明らかに差があるということが分かった。この分析を通じて、AFSが今後どの部分を強化していかなければならないかが明確になる。

分散分析の結果、「ホストファミリー体験」には比較的満足度が高く、次に「日本協会の対応」、「留学生の生活態度」の順で満足度が低下している。

まず、「ホストファミリー体験」に対して満足度が高いのは、いくつかの理由が考えられる。それは、ホストファミリー自身が、さまざまな困難を経験しながらも、留学生と共にやり遂げたということに対して満足感や達成感を感じているということである。比較的満足度の低い「日本協会の対応」や「留学生の生活態度」を考慮に入れても、このホストファミリー体験には満足しているといふことができる。アンケートの中にも、「できの悪い子

⁵ このアンケートはスケールを使ってある部分と、自由筆記の部分で構成されている。今回は、研究方法として統計的な手法を用いたので、これらの部分に関しては観察を加えていない。

ほどかわいい」や「大変な子ほど情が移る」、「(帰国して)ホッとしたが、いないと寂しい」というような感想が多いことから、このことを読み取ることができる。留学生の滞在期間中はさまざまな問題が起こり、その時点での満足度は低いかもしれないが、総合的にはそのようなことも良い思い出となって満足感や達成感に変わるものと思われる。また、ホストファミリーも異文化体験に興味があり、それが経験できたことへの満足感がアンケートの結果に表れたのではないだろうか。ホストファミリーも異文化体験には困難が伴うことは理解しており、受入期間中の体験の中で「異文化理解の難しさや重要性」を感じたこともプログラムへの評価につながったと考えられる。

次に、「日本協会の対応」が中程度の満足度にとどまっている要因は、留学生の選考書類等、事務的な手続きやサポート体制、金銭的な問題等が考えられる。まず、「ホストファミリーが受け取る留学生に関して書かれた書類の記述内容が現実と異なる」というような趣旨の回答が散見された。また、「ホストファミリーは年中無休であるのに、日本協会の事務所は土・日曜日が休みなので困った」や「医療費等の請求に関する事務手続きが煩雑で困る」という回答もあった。サポート体制については、「学生ばかりなので大人のボランティアを配置して欲しい」、「生徒に対し日本での生活のしかた等に関するオリエンテーションの充実を図って欲しい」、等の意見もあった。最後に、もっとも多かったものとして「金銭的な負担が大きい」という回答があった。しかしながら、これらの事柄は AFS の趣旨や目的、運営・サポート体制を十分理解してもらうことによって解決できると考えられる。したがって、今後は、ホストファミリーに対する AFS 活動に関する十分な説明と理解を求めるといった広報活動やオリエンテーションの充実が必要であろう。

最後に、「留学生の生活態度」がもっとも満足度が低かったことの要因として、日常生活におけるさまざまな問題が挙げられる。アンケートによれば、「食べ物の好き嫌いに対し、非常に頑固であった」、「日本に対し興味が薄い」、「英語のテレビや本ばかり見たり読んだりして、コミュニケーションをしようとしなない」、「感謝の念が足りない(ありがとうと言わない)」というようなものが非常に多かった。これらのことからいえることは、来日した留学生に対する事前オリエンテーションを充実する必要があるということである。もちろん、これらの多くは異文化体験をしている日常生活の中で、ホストファミリーと留学生がお互いに努力をすれば解決できる問題が多く含まれ、また、そのことが異文化体験であるということもできる。しかしながら、ホストファミリーの満足度を高め、より多くのホストファミリーを獲得していくためには、留学生の日本文化や日本での生活に対するモチベーションを高めるようなオリエンテーションをしていくことが、今後の重要な課題となるであろう。

3.2 研究(2)

研究(2)では、ホストファミリーの満足度が年度別、地域別、留学生の出身国別で一定の傾向が見られるかを明らかにしようとした。また、この満足度と AFS プログラムを他人に奨めたいと思うかということが直接関係しているかを明らかにすることを目的とした。

まず、年度別での比較を見るために分散分析を試みたが、各年度間の満足度の差は有意ではなかった。このことから、AFS が提供しているプログラムは、少なくとも 1995 年度から 1998 年度にかけては一定の水準を保ち、比較的高い満足度を得ていると解釈できる。

しかしながら、同時に、毎年アンケートを基にプログラムの改善を図ってきたことによる変化を読み取ることはできなかつたともいえる。つまり、各年度間では劇的な変化は見られなかつたということである。しかしながら、これは全体を通していえることであるが、アンケートのスケールが3ポイントスケールであるために、より精密な傾向を捉えきれなかつたということが考えられる。

次に、地域別での比較をするために分散分析を行ったが、各地域間の満足度の差も同様に有意ではなかつた。つまり、全国的に AFS プログラムの質が均一に保たれているということがいえる。これは、本部事務所のほか各要所に事務所を設置することにより、できる限り同質で地域性に根ざしたサポート体制を提供できるようなシステムを作っているためと考えられる。また、AFS では支部の大小にかかわらず、留学生一人一人にボランティアの LP (Liaison Person : 担当者) を配置し、常に生徒と家庭との間に立って日常生活をサポートする体制をとっていることがもっとも大きな要因であると考えられる (財団法人エイ・エフ・エス日本協会、1999 ; 全国高校生留学・交流団体連絡協議会、1999)。しかしながら、これについてもアンケートのスケールの問題が介在していると言わざるを得ない。アンケートの中にも、「スタッフが学生ばかりなので頼りない」というような記述も見られたので、満足度のより精密な分析のために、細かいスケールでの分析が必要となるであろう。

最後に、留学生の出身国別満足度の比較を行った。分散分析の結果、出身国別の満足度の差も有意ではなかつた。したがって、ホストファミリーは、留学生の出身国によってホスト体験の満足度が左右されることはないということが分かる。しかしながら、これは必ずしも留学生の出身国を選ばないということの意味しない。本来、異文化理解を基礎とするこのようなプログラムの究極的な目的は、いかなる文化の人々とも共生できるということではなければならない。しかし、現在 AFS では、ホストファミリーの側の受入希望も十分に考慮した上での生徒と家庭の組合せになっている。そのため、各家庭の希望しない国の留学生を受入れるということは原則的にはないのである。留学生の出身国別の差が出なかつたのは、このことが大きな要因になっていると考えられる。また、本研究では各出身国別の差を検定したが、北米、南米、ヨーロッパ、アジア、オセアニア等のように大きな分類において分析を加えると、一定の傾向が観察されるかもしれない。

補足的に、ホスト体験の満足度と AFS プログラムを他人に奨めたいと思うかが直接関係しているかを明らかにするために、抽出された 10 項目に対し重回帰分析を試みた。

分析の結果、ホスト体験の満足度と推薦したいと思うかどうかの間には相関がないことが明らかになった。つまり、AFS プログラムにおける異文化体験の満足度とそれを他人に奨めたいかということは、無関係と考えなければならないということである。アンケートの自由筆記部分の全体的な傾向としては、留学生と比較的スムーズに過ごした体験を持つホストファミリーは、「他の人にも推薦する」と回答している。また、「他の人にもこの素晴らしい体験をしてもらいたい」というような記述も見られる。しかしながら、少なくとも統計上は特に強い相関があるとは言えない。本研究では、統計的手法を採用したためこのような結果になったと思われるが、自由筆記を中心に質的な手法を採用した研究では、新たな視点が提示される可能性がある。なお、相関が見られなかつたのは、ホストファミリー自身の精神的満足とは別の現実的な要因が関係していると思われる。アンケートにも、

「お金がかかる」「家族の協力が不可欠」「母親が家にいることが重要」「家が狭い」「留学生による」等の記述が多く見られた。つまり、家庭生活にかなり負担がかかるということが主な原因となっている。今後、ホストファミリーを「推薦」という形で開拓していこうとするならば、このような点に十分配慮していかなければならないだろう。

おわりに

21世紀を目前にして、「留学生受入れ10万人計画」が推進されるのに伴い、ますます多くの留学生が日本に来ることになる。それに対応するためには、その留学生がどのような形で滞在するのかということを考えなければならない。大学生や専門学校生は、大学や専門学校が提供する寮で生活したり、アパートを借りて暮らしているものが多い。しかしながら、高校生の場合はホームステイが中心となる。高校生の交換留学を主としているAFSにおいても、来日する留学生の数は年々増加し、ホストファミリーを確保することは重要な課題である。そのためには、ホストファミリーの満足度を高めるために常にプログラムの自己点検と改善を図っていかなければならない。AFSでは、毎年度末、ホストファミリーに対してアンケートを実施し、プログラムの評価と向上のための努力を行ってきた。しかしながら、その分析は客観的な判断とは言い難く、多分に恣意性を含んだものであったように思われる。

そこで、本研究では、AFSが行ってきたアンケート結果を統計的な手法を採用して分析し、より客観的なプログラム評価を行うことを目的とした。本研究では、1995年度から1998年度までのホストファミリー・アンケートを資料として使った。まず、研究(1)では、アンケート自体の妥当性とそれらが提供するデータの意味付けを行うために、因子分析と分散分析を行った。因子分析の結果、プログラム評価を行う上で重要な「日本協会要因」「ホストファミリー要因」「留学生要因」の3つの因子によって構成されていることが明らかになった。この結果を受けて、アンケートの妥当性が証明された。また、各変数の得点間で有意差があるかどうかを測定するための分析を行った。分散分析の結果、各変数間での差は有意であり、「ホストファミリーとしての満足度」「日本協会に対する満足度」「留学生に対する満足度」の順で得点が高いことが明らかになった。この結果から考察されることは、ホストファミリーに対しては、AFSプログラムと異文化体験に関する十分な説明と理解に力点を置いたオリエンテーションの充実が必要だということである。また、留学生に対しては、AFS体験や、日本文化、ホストファミリーでの過ごし方等の日常生活全般とAFS活動に関する来日前及び来日後オリエンテーションの徹底が必要である。

次に、研究(2)では、年度別、地域別、留学生の出身国別によってホストファミリー体験に対する満足度に差があるかどうかを明らかにするために、それぞれに対し分散分析を行った。分析の結果、これらの全てにおいて有意な差は観察されなかった。年度別の比較に関しては、少なくとも本研究の統計を提供した1995年度から1998年度までの4年間においては、AFSプログラムは一定の水準を保ちながら、ホストファミリーにとって比較的満足度の高いプログラムを提供し続けてきたということができた。また、地域別での比較においては、全国的に均一なプログラムやサポートを行っているということが明らかになった。最後に、留学生の出身国別の比較では、留学生の出身国によって満足度が変化

することはないということが明らかになり、留学生とホストファミリーとの組合せは比較的満足度の高いものになっていると判断できる。

ここで、本研究の問題点と今後の研究の方向性に関して何点が言及する。まず、アンケートについてである。因子分析の結果、プログラム評価に必要と考えられる3つの因子が検出され、アンケートの妥当性が証明された。しかし、これらの3つの因子と関連のある項目の数が均一ではなかった。また、プログラムの評価には、ここで検出された3つの因子のほかに、「ホストスクール要因」等を含むことも考えなければならない。なぜなら、アンケートの記述中、ホストスクールに関する記述も多く見られたからである。更に、スケールについては、より精密な変化を測定できるように、本研究では3ポイントであったが、例えば5ポイントにする等の改善も必要である。以上のように、アンケートに関しては、より詳細にかつさまざまな視点から測定できるよう改善することが望ましい。更に、自由筆記の部分は記述が少なかったことを考慮し、できれば全てスケールを使って評価できるような様式を開発していくことも考慮すべきであろう。

次に、研究方法について言及する。まず、本研究は量的研究方法によったことが挙げられる。データを得たアンケートには自由筆記の部分もあったが、方法論上、統計的に処理できる部分だけを抜粋して採用した。自由筆記の部分についても、質的な研究によって分析を加えれば、新たな視点での評価が見えてくるかもしれない。また、今後の課題として、量的、質的研究を統合させてより信頼性の高い研究を行っていく必要がある。次に、アンケートの様式が年度により異なっていたため、筆者らの主観に基づいて項目の整理を行った。このことから、今回の研究は極めて客観的とは言い難い。しかし、1998年度から統一様式になっているので、次回の研究からは客観性が保たれると考えられる。更に、今回は、受入期間にかかわらず全てのデータを採用したが、できれば受入期間との対応も見たほうが良いように思われる。本研究の結果から、途中の困難も含めて達成感や満足感が得られるということが明らかになったからである。このことは、一緒に過ごす時間と達成感や満足感との間になんらかの関係があるのではないかとこの予想ができることを示している。

以上、本研究の問題点と今後の研究の方向性を指摘した。しかしながら、数年間に渡るホストファミリー・アンケートの結果を客観的に分析し、プログラムの評価を試みた本研究は極めて意義深いものである。今後この研究を更に進め、よりよいプログラムの向上とそれに貢献するような、より総合的で客観的な評価方法が開発されることを強く望む。

参考文献

財団法人エイ・エフ・エス日本協会（1999）『AFS Today』

全国高校生留学・交流団体連絡協議会（編）（1999）『高校生交換留学プログラム要覧 '99
異文化体験学習』

文部省学術国際局留学生課（1998）『わが国の留学生制度の概要 受入れ及び派遣』

付録

国名略記	国名
AUS	オーストラリア
BRA	ブラジル
CHI	チリ
CRC	コスタリカ
DEN	デンマーク
FIN	フィンランド
FRA	フランス
GER	ドイツ
INA	インドネシア
MAS	マレーシア
NOR	ノルウェイ
NZL	ニュージーランド
SUI	スイス
SWE	スウェーデン
THA	タイ
USA	アメリカ合衆国
VEN	ベネズエラ